

三波動構成と準備構成の確認、 均衡表好転が買い銘柄選びのコツ

下げ消却と下げ止まりを 確認後、モミアイ放れを狙う

前回の一目均衡表講座で今回は、誤った均衡表の活用法について述べたいとしたものの、熟慮して見ればあまり生産的ではないことに気がつきました。

したがって、今回は銘柄選びのコツ、ヒントとなる考え方を説明したいと思います。以前解説したことがある一目均衡表の型は次の通り。

1、下げの三波動構成を確認

2、準備構成の確認

3、均衡表好転(転換線が基準線を上抜く)

1と2を経た3を典型的な買い場とするのですが、それは次のような考え方に基づきます。図1を見て下さい。

1の三波動の完成でABの下げ消却を確認する。

2の準備構成(基本数値での底値固め)でDの下げ止まりを確認する。

Dからの反発ではCを起点とした下げ三波動形成の可能性を残すため、中間波動形成を確認する必要があります。もしもCDの下げ消却が成されていないならばCを起点

もしくはAを起点とした下げの三波動を形成することになりますから、最大でADの時間分の準備構成をみれば、Dの下げ止まりを確信してよいでしょう。

2の準備構成を確認することで、ようやくDF間が底値圏でのモミアイであったことの証明を得られますが、モミアイでの放れを象徴する3の均衡表好転をもって買いとします。

これは一種の型ではありますが、注意点があります。

まず1に関しては時間関係、計算値とも一致するほうがDでの下げ止まりを期待できるものとなり、CDの下落はABと比較して急でないほうがよいといえるでしょう。CDの値幅が大きく、また時間が短い場合、下げの勢いを考慮せざるを得ないのです。

また2ではDEの値幅は大きいほうがよいといえます。

戻りが転換線までの上昇が精一杯で基準線に達しないというケースも見られますが、その場合、大抵は1の三波動の形の悪さを象徴するものであり、結果的にDを割り込み、下げ三波動を確定しやすくなります。

いずれにせよEまでの戻りが小さい場合、より長い準備構成を経る必要があり、モミアイが長ければその間、均衡表各線は機能しにくいものとなります。

3の均衡表好転以降は、少なくともDを起点とした三波動構成での変化日と計算値までの上昇を期待することになりますが、N計算値からの下落は常に警戒しつつ、E計算値を三波動形成の時間内で達成すれば、さらに上げ相場を期待する、という見方が基

本となります。

この型は見方は実際のところ下げ相場がながらく続いたケースにおいて、特に威力を発揮するものでありますが、上げ相場での調整的下落もまた細かくみればこの型を確認できるでしょう。お持ちの銘柄が底打ちしているか否かをご確認ください。

日経平均株価に連動するか 否かで投資判断を分ける

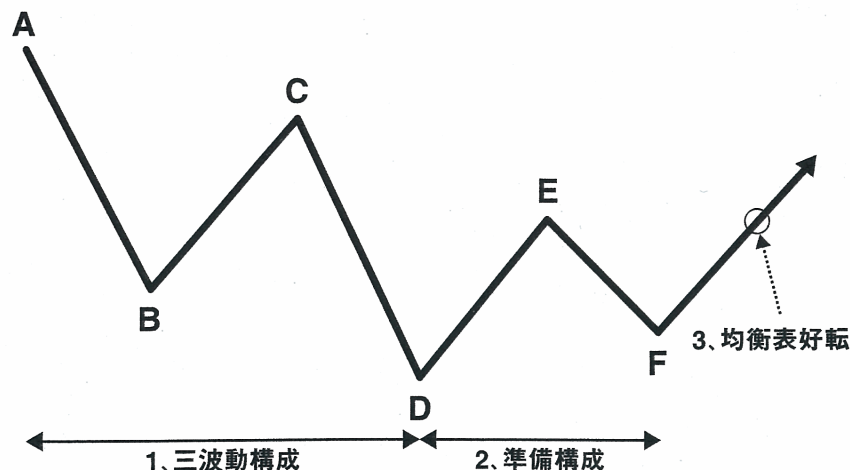
ただし、このような型に当てはめてのみ売買というわけにはいきません。相場の現在性そのものは銘柄によって、その時の位置によって違うからです。

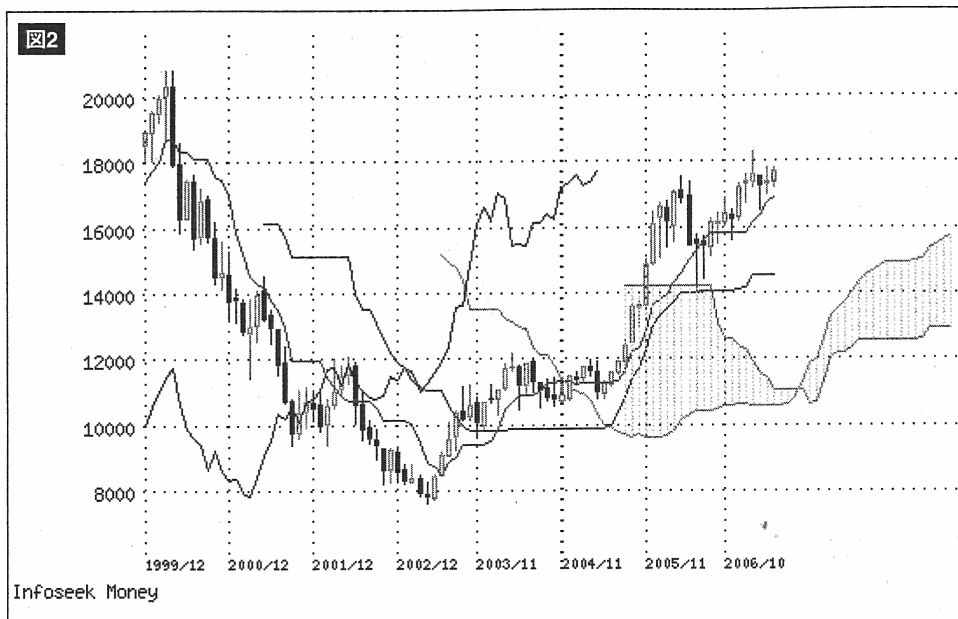
安易に銘柄選びのコツと称したものの、少し困っておりますが、日経平均株価に連動するものと、しないものに分け、しないものに関しては高値を更新し続けているものとそうでないものに分けて考える方が一般的な分け方としては適切でしょう。

日経平均株価(図2参照)は03年4月に一応の底打ち後、04年のモミアイを経て05年4月から出発した相場です。06年4月高値の後3カ月の下落を経て今年2月に高値更新を見せたのですが、月足均衡表での表れ方も、それぞれの線が押し目として機能しています。このため直観的には上げ相場と捉えることが出来ますが、00年高値まで未だに戻してはおりません。

したがって、この上昇力が限界を迎えるとき(時間によるか計算値によるかここでは論じられませんが)00年高値から03年4月安値までの下落の影響を強く受ける可能性

図1





が出てくるといえるでしょう。その場合、日経平均株価に連動しやすい銘柄においては時に下げが急になる、あるいは00年高値から03年安値までは37カ月という長い月数ですから、長期低迷という銘柄も出てくることになりかねません。

また、日経平均株価に連動しない(しにくい)とした方がよいかもしれません)銘柄に関しては均衡表そのもののあり方をより評価すべきです。

ソニーで具体的な活用方法を検証する

今回は次のような選び方もあるという一例を。

図3はソニー月足の一均衡表グラフです。

00年天井から実にきつい下げで、天井か

ら38カ月の下落に対し、37ヶ月の上昇となり06年4月高値を迎えた後、同年10月安値まで下げてきた相場でした。

06年私のメールマガジンでこの銘柄をとりあげた理由は12月の時点で10月安値を割っておらず、06年高値までの上昇力を評価してよいために、先行スパン上限までの上昇は期待できると考えたからです。そうなるかどうかは別として先行スパンに実線が入り込んだときには、上限、下限までの騰落が急であるケースは多いのです。これは月足、週足、日足すべてにいえることですが、このソニーの月足のように先行スパン間の値幅が大きい場合においては、より大きな値幅を期待できるといえるでしょう。

ただし、これも法則として捉えられては困ります。

ソニーは、やはり時間関係がしっかりと確

認でき、底打ち後のモミアイが長期にわたった後、上昇力を見せたことが結果的によかったのでありまして、すべて先行スパンとの関係で片がつくわけではありません。

この銘柄に関しては一応、先行スパン上限を今後、相場水準とできるか否かが鍵といえるでしょう。

相場の入り口として先行スパン上限、下限までの騰落がありえる、ということを第一に考えた以上、先行スパン上限に達したときを出口とするのは当然のことです。罫線という道具は合目的に活用せねば大きな失敗の元となりますので、上の想定は本来、利食えた人がすべきであることも明記しておきます。

均衡表のもろもろのことは、結果的に大事なポイントで矛盾なくつながりやすいのでありまして、直観のみあるいは、論理的推論の

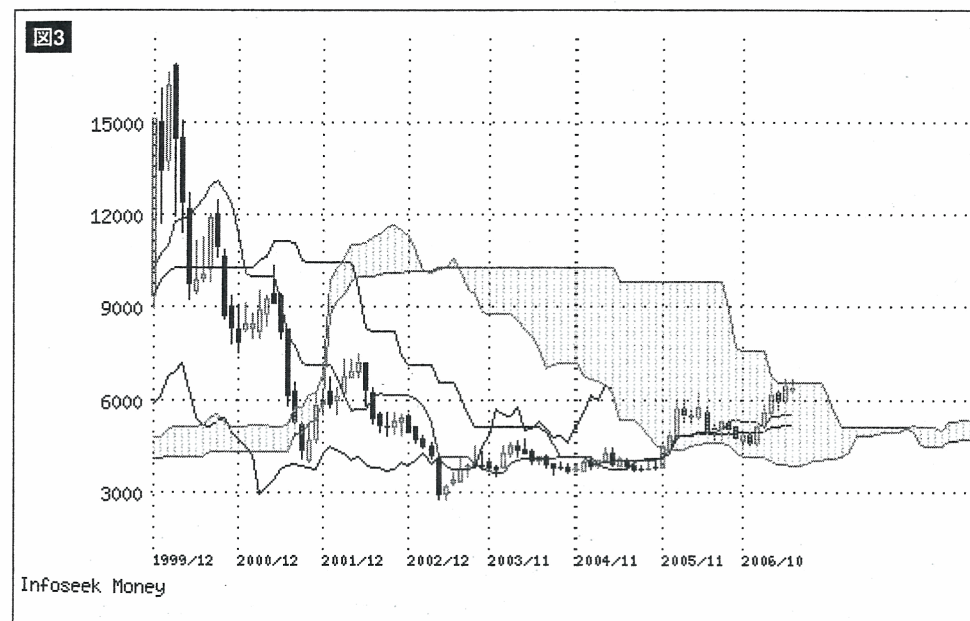
みで理解しようとしてはいけません。

なるべくわかりやすい変動を選ぶことを心がけ、終わった相場をそのままにせぬようにして下さい。

いったん終わった相場が、その後どのような経過をたどり、再出発していくかを経験的に知らねば、何回か述べてきた放れのつかみ方は経験的に身につけません。

それほど難しいことではなく、三波動構成を追いかけ、そのつど均衡表の位置と、計算値の達成の有無を調べておくだけでもやがて役に立ってきます。是非グラフを書いてお試しください。

次回はせっかくですから日経平均株価の89年以降の月足変遷過程を解説します。改めて三波動、相場水準を確認しうる変動といえ、デイトレーダーはともかく、本書の読者に益する点が多いかと思います。



相場を先読みする極意とは 波動変遷の時間関係が重要に

日経平均株価の月足変遷で 全体相場の方向性を予想する

今回は一目均衡表のすべてを用い、日経平均株価の月足変遷について考えてみたいと思います。原則的に図1の①～③の時間関係で波動変遷をたどることになります。2003年4月に最安値をつけその後、上昇相場に転じた日経平均株価の変遷で、89年12月天井に至る上昇は87ヶ月、89年12月高値から03年4月安値まで161ヶ月の下落でした。

③の時間関係を考えれば03年4月安値から87ヶ月目は重要な変化月となりますが、これは随分先のこととなり、2010年6月となります。

とはいえ、03年4月安値に至る下げ過程を考えた場合、この2010年6月は極めて

重要な意味を持ってきます。

96年6月高値から03年4月安値までの下落は83ヶ月、00年4月高値から03年4月安値までの下落は37ヶ月であり、今年2月高値、6月高値で00年4月高値を上抜いていないことから、③もしくは①の時間関係が働く可能性があるのです。

図2をご覧ください。現時点の日経平均株価の高値位置は正確には2月26日1万8300円ですが、6月20日はこれに見合う1万8297円であり、どちらを天井と見なしてもおかしくない水準であります。00年4月高値からの中間波動が③の時間関係でなされる場合、現時点で考えられるのは今年2月高値から37ヶ月目の2010年2月であり、この2010年2月は03年4月安値から83ヶ月目となります。

96年6月高値から03年4月まで83ヶ月の下落ですから、これは96年6月を起点とし、①の時間関係が同時になされているのであります。

また、仮に07年6月を当面の高値とした場合、ここから37ヶ月目は前述の変化月2010年6月であり、07年2月および6月から相場が悪化することは相場の長期低迷を示唆することになりかねないのです。

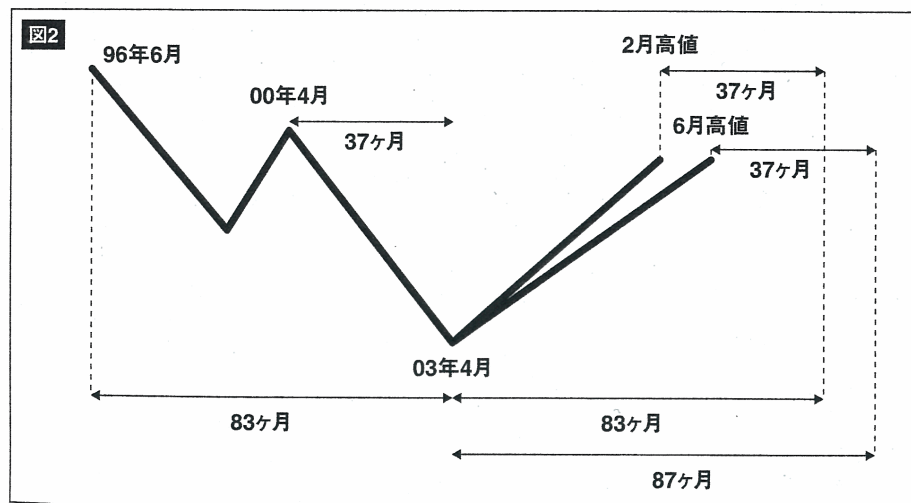
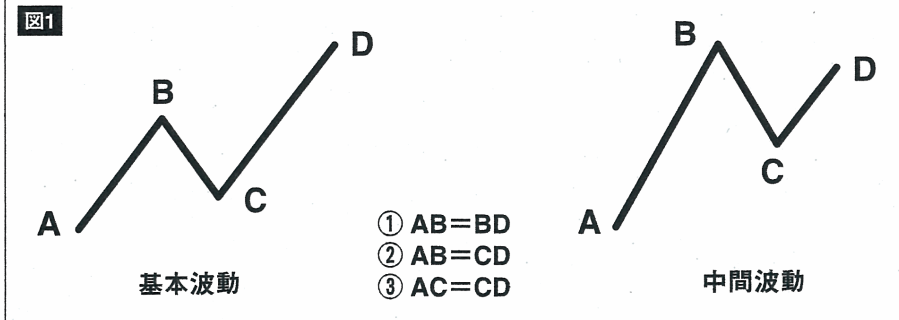
もっとも今、挙げた二つの変化月は今後の変遷によっては「この月までの上昇」へと意味が変化する場合もあります。このように意味合いは変化するものです。いずれにせよ直近の変化月の表れ方次第で捉え方が変わり、必ず重要な意味を持ってくるのでご記憶ください。さて直近の変化月ですが、私は現時点で07年10月を最重要としております。時間関係は次のようになります。

(1) 03年4月安値を中心点とした対等数値

- 55 (03年4月から55ヶ月目が07年10月)
- (2) 92年8月から基本数値183ヶ月目が07年10月
- (3) 04年10月安値から06年4月まで19ヶ月に対し06年4月から19ヶ月目
- (4) 06年6月安値から07年2月まで9ヶ月の上昇に対し07年2月から9ヶ月目

(1) (2)は相場水準を軸に捉えた変化月。(3) (4)は図1の波動変遷で捉えた変化月となります。

(3) (4)ともに図1①の時間関係となり、03年4月安値からの変動は上げ相場であります。必ず三波動構成が今後、なされるべきという考え方は均衡表の基本となります。とくに高値が重なったときは警戒をし、安値が重なった場合、新たな出発点となりやすい傾向があります。しかし、07年3月および6月が変化月として重要であっただけに無条件でこの傾向を当てにすることは出来ません。



03 年4月を大底に対等数値 などが機能して変遷する

03年4月からの変遷はこの大底を中心とする対等数値、03年4月安値以降の上げの三波動構成、そしていくつかの相場水準が機能しつつ変動しているのです。

03年4月に至る下落数は小さいものから12、24、37、83とありますが、03年4月から13ヶ月目が04年4月高値、24ヶ月目が05年3月高値、37ヶ月目が06年4月高値でいづれも上昇値幅が下落幅よりも小さいものになっています。

この上昇幅の小ささにも関わらず、これまで上げ相場を演じてきたのは下落が押しの限界を超えず、結果的に相場水準を押し上げるようになったからといえるで

しょう。

図3をご覧ください。

A90年10月安値、B92年4月陰線、C92年8月安値、D01年3月安値の4ヶ所を起点とし、これらをそれぞれ相場水準と置けば顕著なあらわれ方が確認できます。

Dを起点とすれば26ヶ月目が03年4月安値、42ヶ月目04年5月安値であります。この水準を相場水準と置けば1万1819円×2-7607円=1万4039円がモミアイでの高値の限界となります。58ヶ月目の05年12月にこの値段を上抜きモミアイ放れと相場水準自体の上昇を表しております。96年6月から01年3月までの下落は57ヶ月で、下落時間に見合うモミアイを経て上放れを見せたといえるでしょう。

Cを起点とおけば03年4月安値は129ヶ

月目(65×2-1)でやはり基本数値となります。142ヶ月目は04年5月安値、165ヶ月目は06年4月高値、176ヶ月目は06年6月安値であります。176ヶ月目の07年3月からの下落はこの水準への下落を示唆するものであります。183ヶ月目が今年10月となります。

Bを起点とおけば03年4月は133ヶ月。これも基本数値です。176ヶ月目が06年9月であり06年9月安値の変化月となったことで、その後の上昇を明らかにしたのであります。183ヶ月目は07年6月、6月からの下落は決してよいことではありません。

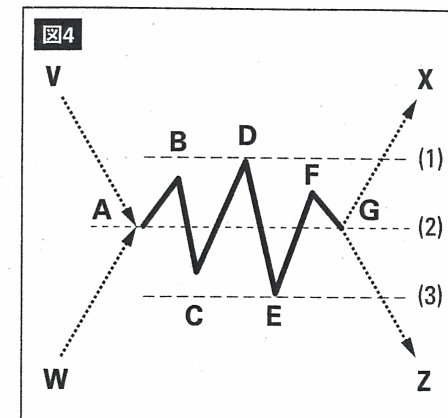
このBの陰線は1万6500円から1万8500円までの値幅を持っており、現時点でどの値段を相場水準に置くべきか明確ではないのです。が、これまでの変動で1万6500円、1万7500円などの値段が重要であっただけに1万6500円はぎりぎりの相場水準と見なせます。

07 年10月までに上昇しないと 下落を念頭に置く必要も

図4をご覧ください。

何度も解説していますが、相場変動は上げまたは下げ過程を経てモミアイを演じ、やがて放れるのです。モミアイ相場はAからGのようにある相場水準を中心に騰落を演じる変動であります。Aからの基本数値ではB、D、Fの高値、あるいはC、Eのような安値をつけやすく、また基本数値でGのように同水準となりやすいのです。

上げと下げによってモミアイが形成されると同時にモミアイとして認識される変動



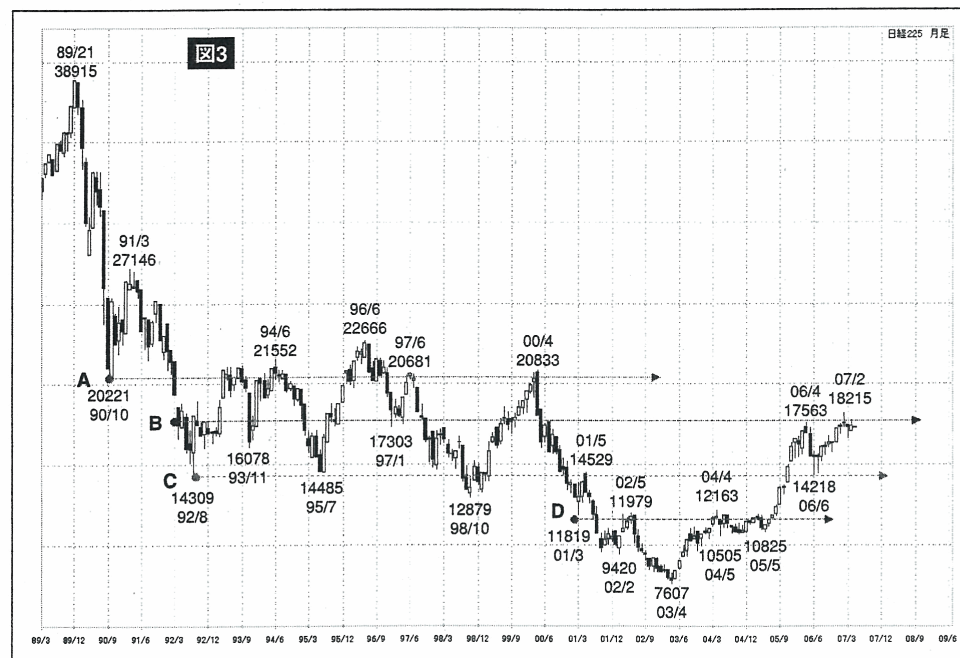
にも騰落を確認できますので、実際には先に示した日経平均株価のように同時並行的にいくつかの相場水準が成立するのであります。

いくつか並列する相場水準のうち、どの水準が機能しつつあるのかを明確にするものが波動変遷であり、上げや下げの波動変遷が方向性を明確にします。

07年10月の変動がきわめて重要なのは、これらの理由によりますが、よりはっきりしているのは、この変化月からの悪化がそのまま00年高値から03年4月までの下落月数37ヶ月の悪影響につながりかねないということです。

現時点で6月高値は変化月として決まっている可能性が高いので、仮に上昇に転じたとしても10月は極めて警戒を必要とする月といえるでしょう。

この月までに上昇に転じない場合には06年6月安値水準までの下落は念頭に置くべきで、再出発の可能性は極めて限られた条件下でなされることは念頭に置く必要があると考えます。



目先の動きに惑わされず 相場の方向性を掴むことが重要

日経平均株価2万円超え予想 は果たして現実的だったか

今年はじめ、日経平均株価の2万円超えを予想した相場関係者は少なくありませんでした。

昨年の4月高値は1万7563円と近い値段にありましたし、確かに年初の段階でこの値段を上抜く想定はあって良いのかもしれません。だが果たして2万円を想定することが現実的であったでしょうか？

私は今年一貫して1万8500円以上を上抜かねば、さらなる上昇相場はありないと、述べてきましたが、それは前回コメントした相場水準によるものです。

1992年4月のローソク足を相場水準として重要視し、この基本数値を軸としてきたためです。

92年4月の変動は高値1万8581円、安値1万6598円、終値1万7390円であり、06年4月高値に至る変動、その後の変動において、1万6500円、1万7500円がよく機能しています。

1万8500円を超えるまでは戻りとして働きかねず、また大きな上げ局面における三波動構成の計算値でも1万8000円台の後半でなければ、上昇自体の独立性を確

信できない、という状態でありました。

したがって、仮に2万円を上抜く相場を想定するにせよ、1万8300円をつけた今年2月、あるいはこれに近い戻りを見せた6月からのごく短い期間しか2万円超えの可能性を考慮に入れるべき時期はなかったかと思います。

一目均衡表における相場観は決して山勘ではありません。前回述べましたように10月の重要性は合理的に説明可能であります。

前回コメント時は3月安値を割る前のものですが、これを割ってしまったことで10月変化月からの相場の悪化はさらに強調されてしまったものとご理解ください。

さて今回は改めて罫線活用の意義について強調したいと考えます。

先の2万円越えではありませんが、上げる相場にせよ、下げる相場にせよ、必ず通過する水準が存在するのであります。

現在500円の相場がやがて大相場になり、2500円は超えるだろうという予想は時にしますが、500円から一気に2500円に上昇するケースはほとんどないでしょう。

1000円、1500円を達成できぬ相場が

2500円になるわけがないのであり、ましてや下げていく過程でつけた500円ならば、先ずは下げ止まったかどうかも確定的ではありません。

罫線活用の意義のひとつは 現れ方の確認にある

つまり罫線活用の意義のひとつは現れ方の確認であります。

一般的に順張りが多くの人に受け入れられやすいのは、相場の現れ方が受け入れられやすいことにあるでしょう。図1をご覧ください。

AからBCの押しを経て、Bの高値を上抜くDのポイントでの買いを順張りでの「買い」、AからBCの戻りを経て、Bの安値を下抜くDのポイントでの売りを順張りでの「売り」としますが、Bを上抜くまで、あるいはBを割り込むまでは、BCは押し、戻りとして確定的であるかどうか判断出来ないのです。

上抜けばDからの伸びがどうであれ、

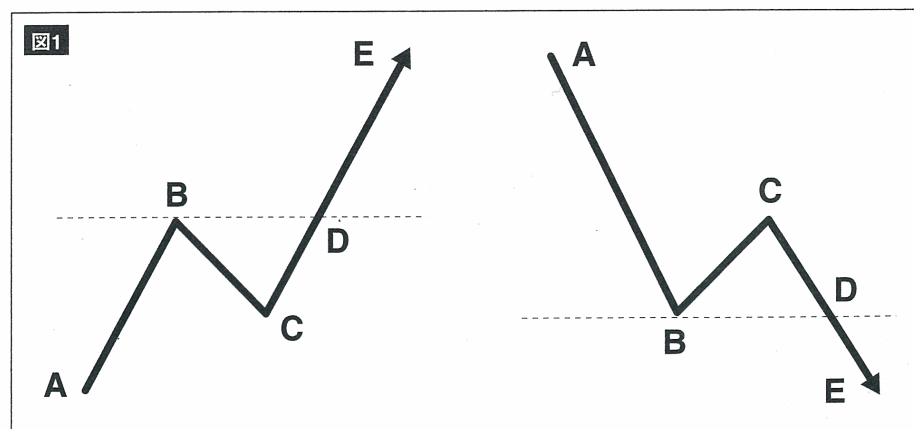
BCが押しであることは絶対的であり、このようなポイントを買ひ場とする鍵足、新値足はその意味で極めて合目的であるといえます。

一目均衡表の場合もちろん高値更新、安値更新を重要視しますが、これも時間関係、相場観によって違います。例えばCからDまでの時間がABやACの時間と同じ時にはDを容易に買ひ場、売り場と出来ません。Dで時間一杯という変動も極めて多いからです。

現れ方の確認といいましても、このように極めて不十分、多くは使い物になりません。とくに機能しないことを、罫線のだまし、の一言で片付けてしまう人にとっては、ご自身の経験で確信度を測るほかありません。

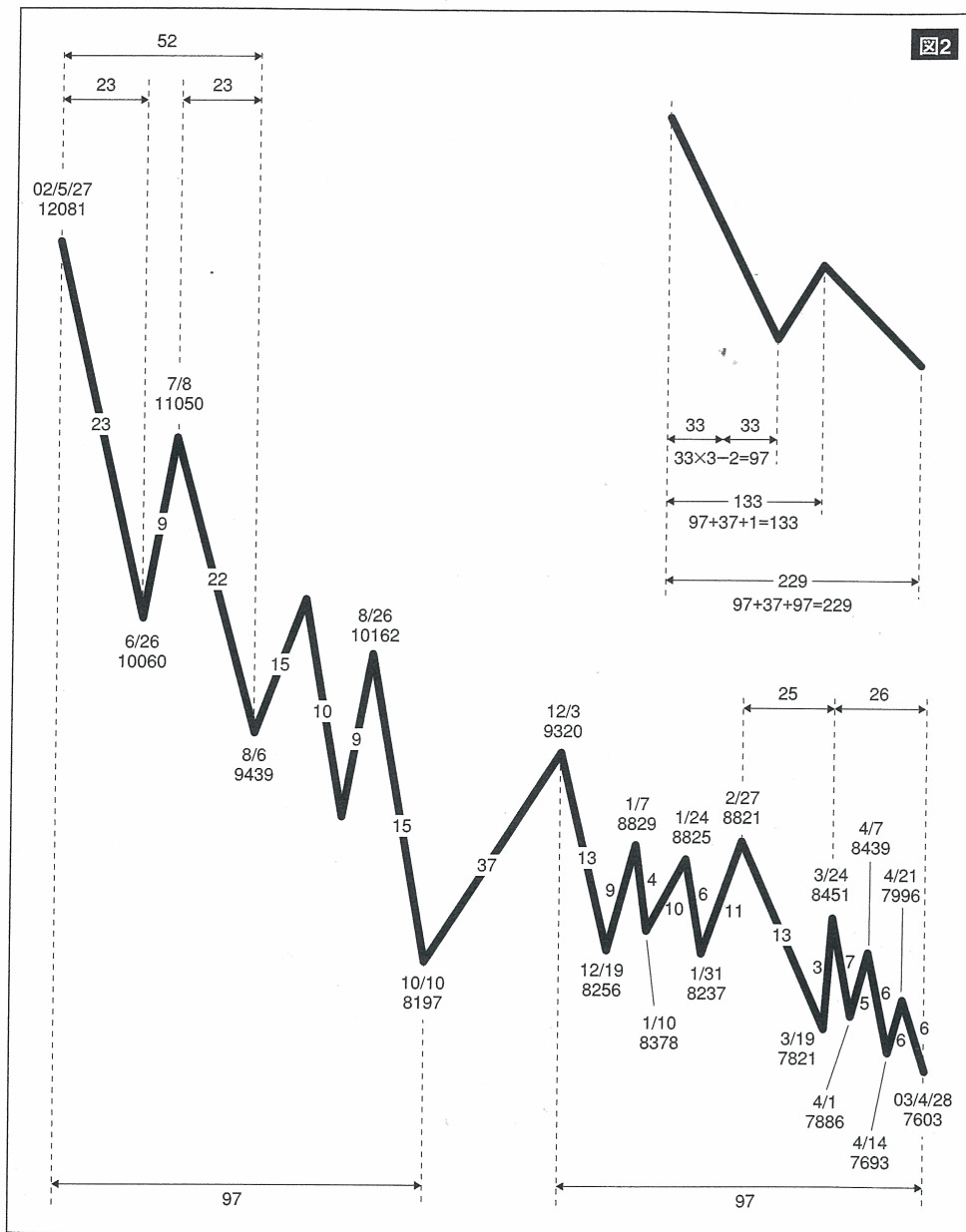
実際のところ多くの方は相場において大事な点を勘違いされているようです。

相場においては方向性が大事であることは、騰落そのもので売買結果が違うことでも頷ける話ではありますが、方向性と



罫線のそもそもの出発点は動くものに
惑わされず相場の方向性を掴むことにあ
ります。

だからこそ、「上げと判断すべきか否か」



本書執筆者の竹内先生が常に重要とされるのはこの点であり、私も先生から多くを教えられております。相場観を持つこと、そして相場変遷によって相場観を変えることは相場の方向性を掴むことと無関係ではありません。

相場が下げ止まったときの変遷過程を想定する

とくにいくつかの起点から見て三波動をなすものが最も良いのです。

図2はかなり古くなりますが日経平均株価03年4月安値に至る変動の時間関係です。

02年5月27日からは大きく第一波動97日間、第三波動97日間という三波動構成で03年4月安値を迎えておりますが、これは同時に03年2月27日を起点として25、26という対等数値での三波動構成、また3月24日を起点とすれば5波動（三波動の二連続）は細かく時間関係が働いていることが判るでしょう。

この図にある26、97、133、229はすべ

92年4月28日からの変動は10日の上昇で先行スパン上限までの上げを見せ、その後11日間のモミアイで5月27日転換線を出発点として大きく上げてきたのであり、少なくとも均衡表を上抜く、さらに押し目を形成とする、という典型的な現れ方を確認しうるはずです。

11月12日現在、日経平均株価は8月安値を割込み今年最安値をつけていますが、果たして三波動のポイントといえるかどうか、8月安値と同様に適切な位置といえないだけに、さらなる悪化を避けるにはよほどの上昇幅、あるいは安値を割らない状態でなければなりません。

上げるものにも下げるものにも理由が見出せるのであり、一目均衡表もまた、この点を整理することからはじめなければなりません。

さて経済変動総研では10月から無料メールマガジンの発行をはじめております。

有料メールマガジン「一目均衡表倶楽部 株式レター」月5250円での日経平均株価相場コメントを3ヶ月遅らせて記載し、その当手を振り返り簡単なコメントを述べております。相場観習得の訓練としてご活用ください。

■お申し込みは
<http://www.mag2.com/m/0000247602.html>
 一目均衡表倶楽部 株式レター 無料版へ。